過去の教訓を今に伝える

多久市の「災害歴史遺産」

これまでに発生した大規模災害に関する記念碑や遺構などを「災害歴史遺産」と名付け、県内に点在する130の災害歴史遺産を調査している防災士の本山和文さん。地域防災への情熱と、過去を今に生かすために私たちができることを伺いました。

本山 和文（もとやま かずふみ）さん

佐賀県防災士会所属の防災士。元佐賀県職員で、東日本大震災の際にボランティア活動をした経験を持つ。北多久町在住。

地域の災害リスクを伝える「災害歴史遺産」

地域の減災と防災力向上をリードする防災士として、佐賀県防災士会に所属する本山さんは、これまで被災地支援といったさまざまな活動に取り組んできました。

平成23年に発生した東日本大震災で、県職員として現地へ派遣された際、震災以前に建てられた数多くの大津波の碑を目にして、こうした貴重な災害の教訓を記したものが佐賀県にもあるはずだと、災害歴史遺産の調査を開始しました。

「詳細がある程度分かっている場合は、先に現地へ向かうこともありますが、基本的には各市町の図書館にある市町村史や郷土史をまとめた文献で、概要を知った後に記録にある地域を訪れ、記念碑や遺構といった災害歴史遺産を探します。狭い道が多いため、小さなバイクで図書館と現地を何往復もして、石碑に刻まれた文を読み解いています」と、休みなどを利用して、遺産に刻まれた災害の歴史を調査してきました。

▲北多久町（山犬原地区）にある「道路河川改修記念」の碑

記念碑が伝える多久市の災害

調査の結果、多久市には北多久町（山犬原地区）と南多久町（上田町地区）の2か所に、「二八水（にじゅうはっすい）」※と呼ばれる昭和28年に発生した大規模水害の記念碑があることが分かりました。特に北多久町の道路河川改修記念碑は、現在も市民に愛される「京町商店街」誕生の歴史につながります。当時は、山犬原川が決壊して農地が砂れきに埋もれ、復旧できずに宅地化計画が進み、現在の姿になりました。

一方、災害が頻発するような地域では、記念碑はあまり建てられないようです。本山さんは「多くの記念碑には、発生した災害について『空前の』、『未曾有（みぞう）の』と書かれています。災害歴史遺産を眺める時は、こうして碑が建つほどに甚大な被害があったのだということに思いを馳せてほしいですね」と、調査をとおして分かった地域の特性を語ります。

▲側面には「昭和二十八年六月大水害」と刻まれています

※二八水（昭和28年 西日本水害）… 昭和28年（1953年）6月25日から29日にかけて九州北部を中心に発生した、梅雨前線を原因とする集中豪雨による水害のこと。佐賀県内でも多くの被害があった。（死者759人、行方不明者242人、負傷者2,775人、全壊3,441棟、半壊29,588棟）